

寄稿

在宅ねっと

NPO法人「血液在宅ねっと」の活動の報告

トータス往信クリニック院長

大橋 晃太 先生



血液の病気は、入院治療やその後の通院、そして時には輸血も必要となるなど、暮らしの中での医療との関わりが長まです。大橋先生は「しんどい状態にある人が、お家で輸血や医療を受けられるように」と訪問診療を開始。さらに同じように地域で輸血や血液がん治療も行つ医療のネットワークを広げつつ、血液内科医療のリソースを有効活用のための取り組みでおられます。

つばさではこれまで、血液疾患の在宅医療（大橋晃太先生）1907号、在宅での安全な輸血（神戸・赤坂クリニック、赤坂浩司先生、西川彰則先生）本紙1912号、在宅での安全な輸血のサポート（和歌山県立医科大学附属病院血液内科、西川彰則先生）本紙2008号で、家で過ごしながら輸血や医療を受けられるよう尽力される先生方をご紹介してきました。ぜひ併せてご参考にさせていただきます。

（橋本明子）

はじめに

血液疾患の患者さんや御家族が、ご自宅で少しでも安心して過ごせるように、

そのサポートを行っていくことが、我々「血液在宅ねっと」の目標です。日本全国、住む地域に制限されることなく、ご自宅で過ごすという当たり前のことが、当たり前前に選択できるような医療体制・社会体制の構築を目指して、活動をすすめています。

血液情報広場・つばさの皆様にもご支援を頂いて、すこしずつ歩みを進め、今年2021年2月には、おかげさまでNPO法人となることができました。

治療・療養の場の選択肢を増やす

患者さんのご状況に応じて、お家で安心して過ごすために必要なものは変わってきます。NPOつばさの活動も、まさに今ご病気の治療をされている方々、これから治療に向かおうとする方々、治療が終わられてこれから社会復帰に向かわれている方、それぞれにとって、お家で安心して生活するサポートに大きく貢献されていると思います。我々は、また少し違った切り口から、ご自宅での生活をサポートしていきます。それが「治療・療養の場の選択肢を増やす」ことです。

血液内科の外来はパンク状態

現在、血液内科を受診される患者さんの総数は、高齢化の影響も大きく、急激に増加しています。一方、血液内科医の総数は微増はしているものの、患者さんの増加には全くついていくことができていません。また、近年の化学療法法の進歩により長期間、病勢を抑えるために投与を続けるような形のお薬が増えており（多発性骨髄腫やMDS、悪性リンパ腫などで盛んです）、これで病気と付き合いつながりながら生活できる方も増えており、患者数の増加はむしろ拍車がかかってくると考えられています。

血液内科外来はパンク状態、ゆつくりお話しをしたくてもできない状態となり、患者さんや御家族は当然ですが、医師側にも大きなストレスがかかります。これと同じ事が入院の患者さんにも起きています。「それなら血液内科医を増やせばいいじゃないか！」と当然思われると思います。より多くの若い先生達に血液内科を選択してもらえようという工夫も必要ですが、どの科も猫の手も欲しい状況でもあり、なかなか難しいことです。限られた血液内科のリソースをいかに有

おおほし ことた 大橋 晃太 先生

プロフィール

【経歴】

東京都立戸山高等学校卒業
東京大学工学部にて博士号取得後、
東京医科歯科大学医学部医学科へ学士編入学
以後、みさと健和病院、国立病院機構 東京医療センター 血液内科／緩和ケア科、国立がん研究センター東病院 血液腫瘍科（外来担当）勤務を経て開業

【資格】

日本血液学会 血液専門医
日本緩和医療学会 緩和医療認定医
日本内科学会 内科認定医・専門医
日本がん治療認定医機構 がん治療認定医

効活用していくかが、ますます大切に
なってきました。

一つの方法として、地域医療の活用を、
我々は提案しています。「一人主治医制」
という言葉をご存じでしょうか？これは
国全体としてすすめている医療のかけり
方で、専門性の高い基幹病院の「専門医」
と、近隣で身近な相談に科の垣根を越え
てしつかりのつてくれる「かかりつけ医」
を持ちましようというものです。でも、
血液内科のような専門性の高い医療を、
地域に任せられるでしょうか？これは、
YESかNOかで答える様な問題ではな
く、「任せられるものを任せていく」と
いう立ち位置でやっていくことになる
と思います。地域にも実は血液内科の経験
の豊富な先生がいるエリアも多くありま
す。また、必ずしも血液内科医でなく
もできることもたくさんあります。でき
る限り、基幹病院の病棟や外来の負担を
減らして行くことが、患者さんのため
にもなってきました。近い将来、もっと身
近なクリニックで。血液内科を標榜して、
日々の困ったことを気軽に相談できる場
所が増えたり、ご自宅で訪問診療で輸血
をはじめとした今まで基幹病院の外来通
院をしなければできなかった医療行為が
受けられるようになったり、地域医療の
状況を変えていきたいと思えます。もち
ろん、基幹病院の外来にかかり続けた
い！と思う方や、もっと入院していきたい
と思う方を、追いつくような変化であつ
てはなりません。治療・療養の場の選択
肢が増えることで、むしろこういった1

人1人の患者さんの希望に沿う「余裕」
が、医療機関側に生まれるはずで
す。医師も看護師もコ・メディカルも、患者さ
んも、血液疾患に関わる全ての人々の願
いは、形は違えども一つであると、確信
しているからです。

血液内科医療のリソース 有効活用のために

以下に、我々の現在進行中のプロジェ
クトのいくつかをご報告をさせて頂きま
す。あまりピンとこないマニアックなも
の含まれておりますが、遠い所では上
記のような目標に向けてのステップに
なっています。どうかご支援の程、よろ
しくお願い致します。

①血液在宅リソースマップの作成

血液疾患の患者さんを地域の病院で診
てほしいと考えた際、病院の医師や看護
師が何が困るかを調べたアンケートで
は、1位は輸血を実施してくれる医療機
関の確保でした。つまり、地域で輸血の
対応をしてくれる医療機関はとも限ら
れているのです。輸血の実施にかぎらず、
血液疾患の患者さんの診療を担ってくれ
る医療機関をマップ上に載せたものが
「血液在宅リソースマップ」です。この
マップを見れば、お住まいのエリアのそ
ばで対応しているところを探せるので、
スムーズに連携をとることが出来ます。
血液内科の専門医の先生の所在も含め
て、この「血液在宅リソースマップ」を、

各基幹病院の連携室や、血液内科を標榜
している病院などに配布（実際にはイン
ターネット上で閲覧）する予定です。現
在、東京都・神奈川県・埼玉県など首都
圏のエリアについて情報収集してマップ
を作成し、いくつかの基幹病院に使って
頂いて、ご意見を収集しているところで
す。今年度中には、日本赤十字社からの
情報提供により、抜けのない全国規模の
マップの作成を開始します。

②ATR（輸血用ポータブル冷蔵庫） の無料貸出開始

先程もお話ししましたように、輸血の実
施が、地域連携のカギとなってくると言
われていますが、診療所のような小規模
の医療機関で輸血を行う場合、血液製剤
の温度管理というのが大きな問題になつ
てきます。輸血細胞治療学会の示した
在宅赤血球輸血ガイドでも、専用冷蔵
庫の用意が求められています。これを
用意するのは診療所側に大きな費用負担
がかかります。実際、7割の小規模医療
機関では専用冷蔵庫を用意できていな
いという報告もあります。これは、患者さ
んにとっても血液製剤の質が担保されな
いことになり、また何かトラブルがあつ
た際に医療機関側にも責任が問われま
す。こういった背景もあり、なかなか地
域での輸血を実施して下さる医療機関が
増えないという現状があります。

そこで、我々は輸血用のポータブル冷
蔵庫（ATR）を無料で貸し出すプロジェ
クトを2021年4月より開始しました。

都立墨東病院で倫理審査を受けて臨床
研究として実施しており、また勇美記念
財団からのサポートもいただくことがで
きました。合計20台のATRを貸し出し
ています。

また、このATRを貸し出す際に、輸
血時の院内マニュアルの準備や、スタッ
フの連携の仕方などをサポートする「在
宅輸血スタートセット」という形で提供
することで、より分かりやすい形でお渡
しできるよう工夫していきます。このよ
うな活動を通して、地域で輸血を担って
くれる医療機関を、安全な形で増やして
いくことが目標です。

③在宅輸血連携研修会

在宅や外来での輸血ができる医療機関
を地域で増やしていくために、在宅輸血
連携研修会を規格していきます。
2020年1月に第1回を東京で行い、
100人以上の方々が募集枠を超えて集
まり非常に盛会でしたが、その後はコロ
ナ禍となり、以後の実施が滞ってしま
いました。今年秋～冬に兵庫県神戸市で、
冬～春にかけて東京or神奈川県で、第2
回～3回を実施予定で進めてきましたが、
残念ながらコロナ禍の影響で、対面での
実施は難しいのではという判断をしまし
ました。現在はリモートでの開催、オンデマ
ンドでの配信を検討しています。こちら
も勇美記念財団の研究助成が頂けました
ので、何とか前にすすめていきたいと
思っています。